

法務研究財団研究助成
第178号研究 報告書

2026年8月8日

主任：山田直子・関西学院大学法学部教授

研究テーマ：

被疑者取調べ記録媒体の利用と取調べ手法の規制に関する学際的研究

研究目的：

現在実施されている被疑者取調べ記録媒体を用いて取調べの実態（日本で取調官によって用いられている尋問技法）を調査すると共に、あるべき被疑者取調べについて学際的かつ比較法的に調査・検討を進める。

研究期間：

2024年8月1日～2026年7月30日

研究活動記録：

本研究プロジェクトでは、被疑者等の取調べにおける取調べの技術に焦点を置いた調査・実験を通じた研究を中心に進めてきた。具体的には、①これまでの実際の被疑者取調べ事例の調査、②模擬取調べ実験を通じた取調べ技法に関する心理学的な量的・質的分析、③国際的な取調べ技法の調査、を展開してきた。また、そうした調査研究活動について学会報告やジャーナル等での出版により成果還元を行ってきた。

具体的には、①について、研究助成期間において4回の公開研究会を実施した。2024年11月30日に「刑事取調べ映像から見る被疑者取調べの課題」と題して、京都弁護士会館において、いわゆる「江口国賠」の当事者である江口大和氏（元弁護士）と代理人趙誠峰氏（第二東京弁護士会）をお招きして開催し、貴重な取調べ映像を再生しながら身体拘束中の被疑者の心理や置かれている環境等の影響について当事者ならではのリアルな体験を伺うことができた。続いて2025年8月1日には、オンラインで「検事取調べの手法をめぐって：元検察官に聞く」と題して市川寛氏（第二東京弁護士会）をお招きして伝統的な検察庁における被疑者取調べの実態についてお話を伺った。2025年11月15日は京都弁護士会館で「全ての取調べ・聴取を可視化せよ！ 取調べ録音録画制度の完全実現を目指して」と題して、いわゆる大川原化工機事件の元被告人であった大川原正明氏と、共犯者とされる第三者の証言によって冤罪が作られたいわゆる福井女子中学生殺害事件で再審無罪を勝ち取った弁護団から端将一郎氏（福井県弁護士会）をお招きして、非裁判員裁判事案では被疑者ですら取調べの録音録画の対象とならず、第三者が被告人の有罪

立証で重要な役割を果たす場合でも参考人の取調べも録音録画の対象となっていない現状がもたらす危険性を共有することができた。また、2026年6月27日には、オンラインで「続く取調べの弁護人立会い！現場からのレポート第2弾」と題して、実際に供述弱者の取調べに立ち会う経験をされた松本尋規氏（岐阜県弁護士会）をお招きし、詳しい実際の立会いの様子や、運動論としての今後の立会い実現への取り組みなどが活発に話し合われた。

社会的な還元としては、これまで、2024年10月27日に一橋大学で開催された法と心理学会年次大会において、研究主任と指宿が「日本の被疑者取調べと「正義エージェント」仮説」と題して報告し、2025年7月13日に甲南大学で開催された、全国の刑事訴訟法研究者が集まる刑事司法研究会において、研究主任が「可視化時代の取調べ技法：カナダにおける新たな取調べ技法導入の試み」と題して報告を行った。2025年11月8－9日には南山大学で開催された法と心理学会年次大会において北村亮太が「取調べ技法及び記録媒体の違いによる任意性・信用性判断の特徴」と題してポスター報告を行った。また、2026年7月8日には、ベルギーはルーベンカソリック大学を会場として開催された国際取調べ技法学会(international Investigative Interviewing Research Group)の定期大会において、江口国賠事件等の実際の検察官取調べの映像を使って「The Sound of Silence: Anatomy of the Psychology of the Silent Suspect」と題する報告を行って好評を博した。

研究成果公表について：

前述した、2025年11月15日に実施した「全ての取調べ・聴取を可視化せよ！ 取調べ録音録画制度の完全実現を目指して」の音声起こしを、オンライン媒体で、無料で閲覧できる「刑事弁護 OASIS」誌上に再現掲載を予定している。また、2025年7月13日に甲南大学で行った研究報告を元に法律専門誌に「カナダにおける自白法則の展開と被疑者取調べ技法の開発」と題して論文を公表する準備を進めている。参考資料としてこの報告のスライドをPDF ファイルとして資料として提出する次第である。

以上